



近代和風邸宅の復原研究 —山梨県・根津嘉一郎邸—

K00020 奥原 由美子

I はじめに

I-1 研究目的

明治以降の近代化過程の中で、日本の建築文化は独自の発展を遂げてきた。「近代和風建築」は江戸期から継承した和算による木割術と規矩術を基本とした建築文化が、明治以降の西洋化の影響、次いでナショナリズムの影響などを受けながら技術的、思想的に開花した時期の建築群である。しかし外観や室内意匠などが、江戸期までの伝統的な形式をとる木造建築との差異を判別しにくいことから、その歴史的評価や遺産調査が遅れていた。近世までにはありえなかった近代期の建築的特徴に着目し、日本的近代建築としての和風建築が位置付けられ、歴史的意義を与えられるようになったのはごく最近のことである。文化庁による文化財指定が進められているなかで、本研究の対象となる根津嘉一郎邸もその予備軍である。

本研究では近代和風建築のうち、一九〇四年（明治三十七年）の日露戦争、大正期の第一次世界大戦などによる好況を背景に資本主義の様相と密接に関わりながら生み出された建築を中心に捉えることを前提とする。資本主義の中で財を成した人物の普請道楽ともいえる建築群に焦点をあて、和風大邸宅・根津嘉一郎邸の当初の復元的考察を行う。

そして歴史的価値のある文化遺産を若い世代に継承するため、現代にどう活かしていくかを提案することを目的とする。

I-2 研究方法

- ① 根津嘉一郎邸の実測調査を行う。
- ② 当初図面と実測調査に基づき、三次元 CAD を用いて復原を行う。調査は現在の根津邸および部分移築先の一行寺である。
- ③ 日本の政治・経済に影響を及ぼした人物の邸宅と比較検討し、調査した建物の特徴と建立背景について考察する。
- ④ 今後の活用方法について提案する。

II 初代根津嘉一郎邸について

II-1 根津嘉一郎について

表1 年譜

年代	本人事項
一八六〇 (万延元年)	・甲斐国東山梨群賀正徳寺村（現・山梨県山梨市）に生まれる
一八九〇～ 一八九六～	・村会議員、県会議員に当選 ・上京、京橋に居を構える ・多数の会社設立を経て、東武鉄道、東京地下鉄道などの社長を務め「鉄道王」と呼ばれる
一九〇四～ (明治37年)	・衆議院議員、昭和元年（一九二六）貴族院議員となる ・幾多の会社経営など実業界で活躍する私財で武蔵高校（現・武蔵大学）や根津科学研究所を設立、多方面への寄付なども行う
一九四〇 (昭和15年)	・正五位勲二等旭日重光章受章 ・八〇歳で逝去

東武鉄道グループの創業者、根津嘉一郎は伝記によると財力のわりに質素な日常生活を送っていたが、古美術と茶室と庭には贅を尽くす、という人物でもあった。根津美術館（東京・青山にある根津の本邸跡地に建てられた美術館）には根津が収集した国宝級の古美術品が展示され、また熱海にある別邸（戦後は「起雲閣」という高級旅館を経て、現在は熱海市の所有となり一般公開されている）の庭は自ら直接現場に立って庭師を指揮するほどであった。

II-2 本建造物の概要

昭和初期の山梨県を代表する大邸宅、根津嘉一郎邸は、当時の最先端の建築様式を取り入れた近代和風建築の傑作である。財政界の巨頭根津嘉一郎一族の故郷山梨での迎賓館としての機能と、大地主根津家の地主経営の場としての機能、居住空間としての機能を併せ持っている。

主屋は、車寄せやベランダ、洋風応接室などの洋風建築と畳廊下や二間連結の客間、茶室などの数寄屋建築とをバランスよく組み入れた豪華な迎賓館としての機能、茶の間や居間、食堂などの居住空間、事務室や蔵などの地主経営の場としての機能があったと考えられる、近代和風建築の中でも貴重な建築である。残念ながら迎賓館としての部分は現在移築されている。また壮大な長屋門や高い堀、数多くの蔵、広大な敷地は県内2番目の大地主であった根津家が小作地主経営を行った場としての機

能を伝えている。建物だけでなく、池を配した中庭や、松と小川を配した広大な日本庭園も確認されている。初代根津嘉一郎邸は、住宅様式の変遷を伝える文化遺産として第一級のものである。

II-3 平面構成

実測調査の結果と当初図面を比較すると、まず、建物の「」半部分が失われている。その部分は一部が一行寺の庫裏に移築されている。その他に食堂に隣接していた女中室は取り壊され、階段は増改築されたことが分かる。また2階においては床の間の位置が変化し、数寄屋風の書斎は畳の間に造りかえられている。

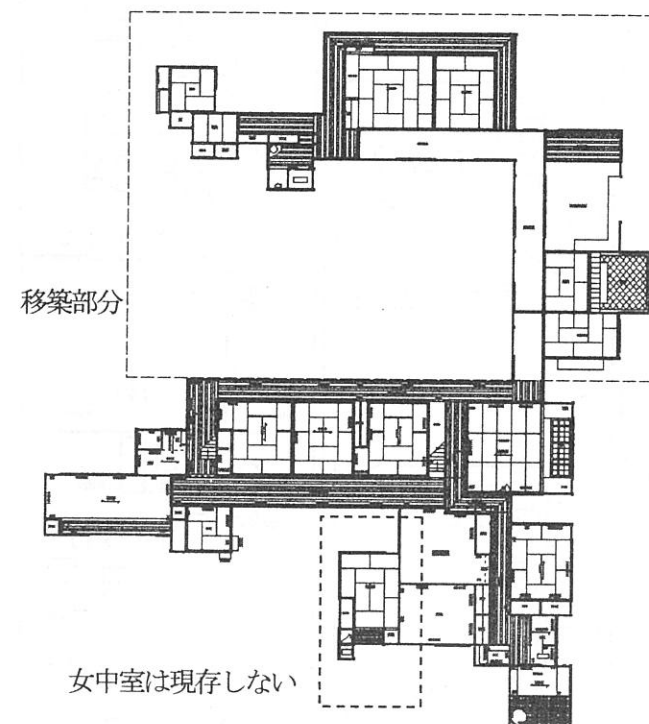


図1 1階平面図 (当初)

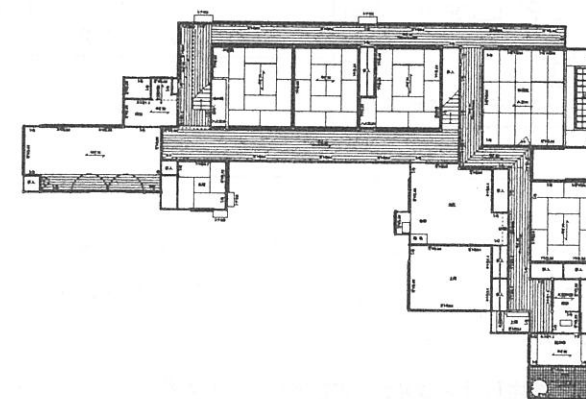


図2 1階平面図 (現状)

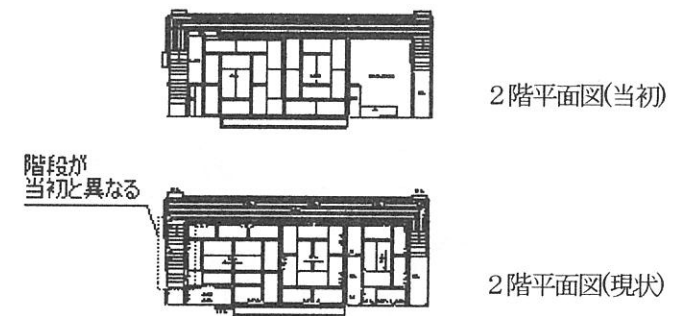


図3 2階平面図 (当初・現状)

II-4 移築部分

昭和四年、根津邸の一部は山梨県東山梨郡春日居村（現・山梨県笛吹市春日居町）にある一行寺に移築された。現在は寺の庫裏として利用されている。現存する建物（庫裏）を見ると、根津邸の設計当時の平面構成はほぼ失われていることが判る。根津邸からは二間続きの座敷と水周り、玄関部分が変形されて使用されている。実測調査により天井高が割り出され、洋間と連結した和室は天井がとても高い空間であったと推定される。

また根津邸の設計図面に記されている茶室は根津家とゆかりのある浄土宗大本山増上寺に移築されたと聞く。しかしながら、現在の増上寺敷地内に痕跡はなく、戦災により焼失した可能性が高い。



図4 一行寺 断面図

III 近代和風建築の変遷

III-1

近代和風建築は、明治後期から大正期にかけて数多く建てられ、当時の新しい考え方に基づいて設計されている。明治時代から、接客用スペースに西洋の様式を取り入れる手法が盛んに導入されてきたが、先進性と財力の象徴として「洋」の部分を目立たせる造りが明治時代中期までの主流であった。しかし、明治時代後期から大正時代にかけては、逆に「洋」の部分を表に出さない様式が主流となる。その後、昭和初期以降はモダニズム建築の影響で、和風の部分を簡略化していくこととなる。

表II 近代和風大邸宅の平面図類型表

	和館			洋館
	和風御殿型	書院風和洋折衷型	和洋併列型	和室中心型
明治	高取伊好 邸 (M21)	土八郎兵衛 邸 (M21)	渋沢栄一 邸 (M9)	有栖川宮威仁 別邸 (M41)
	林国蔵 邸 (M40)	村上喜代次 邸 (M30)	伊藤伝右衛門 邸 (M30)	清藤盛美 邸 (M42)
	三輪善兵衛 別邸 (T0)	田中光顕 邸 (M40)	和田豊治 別邸 (T9)	右近権左衛門 邸 (M43)
大正	日下部久太郎 邸 (T4)	麻生太吉 邸 (M42)	鈴木三郎 邸 (S7)	古河虎之助 邸 (T6)
	国武金太郎 別邸 (S4)	根津嘉一郎 邸 (S2)	遠山元一 別邸 (S11)	野口喜一郎 邸 (T11)
	島知久平 邸 (S6)			大谷藤豊 邸 (S6)
昭和				根津嘉一郎 別邸 (S4)

III-2 根津邸の位置づけ

近代和風建築の変遷を平面で分析すると上記のように大別される。今回対象となる邸宅は明治から昭和期にかけて和の空間が組み込まれているものとした。表には明治期のものが圧倒的に多く挙げられた。昭和期に入ると

大邸宅のほとんどが構造や意匠において洋風で構成されるようになるのでこの表にあまり多く挙げられる例は少ない。

ここで注目するのは「書院風和洋折衷型」である。和洋折衷型は主に明治期に集中しており、大正期に建てら

洋館
洋室中心型
旧三井八郎右衛門 邸 (M23)
山形有朋 別邸 (M31)
岩崎久彌 邸 (M41)
鶴崎平三郎邸 (M41)
村井吉兵衛 別邸 (M42)
松本健次郎 邸 (M43)
諸戸清六 邸 (T2)
西村伊作 邸 (T3)
神谷伝兵衛 別邸 (T7)
多木久米次郎 邸 (T7)
谷口房蔵 別邸 (T12)
根津嘉一郎 別邸 (S4)

の和風住宅が成立した要因としては幕藩体制の崩壊や近代工業の確立がある。藩お抱え大工は財を築いた金持ちの出入り大工となり、民家の中に書院造りという新しい格式を取り込んでいく。江戸時代に潜在していた書院造りは、和洋折衷スタイルという新しい形式で庶民の夢として世間に広まっていくことになる。

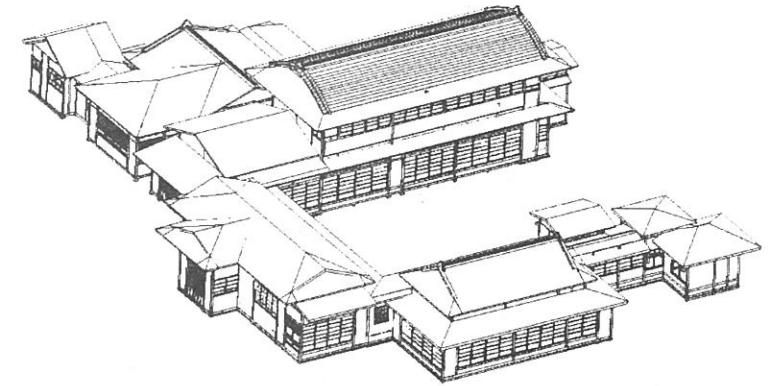


図5 根津嘉一郎邸 復原透視図

IV まとめ

根津邸のように昭和期に建てられた和洋折衷型の現存する近代和風建築はまれである。明治以降の和洋折衷の資料として大変貴重なものなのである。加えて、現存しない母屋部分には根津邸本来の魅力が詰まった空間がある。近代和風の特徴的な大空間の和室や氏がこだわった自然味の深い茶庭がそれである。貴重な資料をより良い状態で後世に伝えていくためにも、復原することを強く望んでいる。近代和風建築が誕生したように、日本の伝統的な生活文化を今に残し、今に活かしていくべきだと思う。

〈参考文献〉

- ・山梨市根津邸に関する報告書より
- ・「根津翁傳」根津翁傳記纂會 昭和三六年
- ・「近代和風建築」村松 貞次郎 著 昭和六三年
- ・「近代和風建築」上・下巻 初田 亨 著 一九九八年
- ・「歴史遺産 日本の洋館」第1巻～第6巻

藤森 照信 著 二〇〇二年 他

れた例はみられなかった。そのような中、昭和2年に建てられた根津嘉一郎邸は和洋折衷型に分類される。

近世以前に貴族層、武家層の住宅に多く見られた書院造りも庶民層が財力を持つにつれ、積極的に座敷に書院造りを取り込んでいく。洗練された意匠をもつ書院造り